

## 第8回黒島小中学校検討委員会議事録

1 日 時 平成29年7月12日(水) 19:30~20:30

2 場 所 黒島小・中学校 校長室

3 参加者 濱田・牧野・大村・鶴崎・古里・松崎・山内・惣田・高田・木下  
山崎・戸田 計12名(欠席:田代) ※敬称略

### 4 校長挨拶

○市教委と確認し、市議会6月定例会で義務教育学校になることと、黒島小中学校になることが決まった。

○学校も4月からスムーズに開始できるように、準備に取り掛かっている。

### 5 黒島小中学校の跡地利用と島留学について

#### (1) 説明(横山黒島支所長・三原地域おこし協力隊員)

○島内の課題について。学校が廃校になると、子どものいる世帯は転居が必要となり、転入者が減り、転出者が増える。そして労働力人口が減少。島に住む担い手が育たなくなり、文化(地域行事など)が維持できなくなる。

○島内の課題解決のためには、生徒を増やすしかない。方法の一つは婚活支援・UJIターン推進などで地域の子どもを増やす。二つ目は他の地域から特認校制度・離島留学・フリースクール設置などで子どもを増やす。

○離島留学について。基本1年単位で学校に通学させる。里親型が一般的だった。最近では寮母さんと暮らす寮合宿型・親も一緒に移住してもらおう親同居型がある。全国で離島留学・山村留学も含め寮合宿型は198名、親同居型が121名、里親型で127名。現在増えてきている。

○鹿児島県三島村が里親制度で20年してきている。本土から40km離れ、フェリーで3時間かかる。小学生も3~10名、中学生は2から8名。実際は学校の先生の子どもがいる。20年間で328名が卒業。そのうち一部がこの島に戻り酪農の仕事をしている。

○この三島村は「しおかぜ留学」に対して沖縄から北海道まで全国各地から募集している。特徴は、面接をする。1次面接は教育委員会。合格者は島に行き、2次面接。校長・教頭・里親と面接。ここで合格してやっと入学が許可される。このような制度を採っているのは、やりとげる子どもに来てほしいという思いがあるから。自分で自分のことができない子どもや親から無理やりの子どもは不合格。受け入れた後も問題があったら解約をすることができる。

○福岡県宗像市の地島(じのしま)、合宿型。12名中5名が離島留学生。本土から近く

- フェリーで15分。地島は漁村留学。黒島小中学校の跡地利用に一番近い留学の制度。
- 学校がこのままだと廃校になるからということで、始まった。島を挙げて漁協・消防団の団長・小学校職員・実親の会などのメンバーが集まり、「育てる会」を発足させ、運営している。
  - 離島留学の効果として、教育の効果が高い。学校に行かなければ外に何（娯楽）もない。だから学校に行く。学校に行くと友達がいて楽しい。
  - 昨年度までは「不登校児を対象に受け入れる」と考えていたが、今は幅広く、「留学を希望する全ての児童生徒」を対象にした受け入れを考えている。
  - 誰でもいいというわけではなく、面接をして目的にあった児童に来てもらうための選考を行う。
  - 自分（三原さん）が何もかもやるという考えだったが、業者等に委託し、佐世保市が主体となってやっていくという考えに変わった。民間でやると月謝がかなりの額（10万円以上）になるので難しい。
  - 大切なのは子どもを増やすだけでなく、同時に島の外からの移住者を増やすことが必要。島に帰ってくれる島の人を増やすことが必要。島の根本的な問題を解決しないといけない。
  - 里親制度と跡地利用。里親制度で生活できるだけの収入があれば、島から出て行った人が買えることができる。90,000円を考えている。
  - 地島のなぎさの家が自分のイメージに近い。小中学校の跡地を離島留学センターとして共同生活施設を設置したい。施設には寮母・指導員等を設置したい。その実施のために、本委員会のような保護者地域の会合をつくって話し合いたい。

## (2) 質疑応答

- はじめに黒島小中学校の廃校と説明があったが、黒島は廃校になることはなく、休校になる。通学に1時間かかるため、廃校にはならないと思う。
- 子どもがいる親が「学校がないから帰ってこれない」ということは黒島ではない。
- 確実に子どもが減っていくということはわかっている。
- 島留学した児童生徒については、全員が来て全員が卒業したのか。2～3割の児童生徒がいたと聞いた。年度によって違うが、2～3割の子どもが卒業できなかったと聞いた。
- なぜやめていったのか理由を知りたい。
- 保護者が大丈夫なのかが心配。これは校長・教頭の面接の後に保護者や育友会長の面接があればよい。
- よく親も我が子どもをやれるなあと思う。→子どものほうから「自分から行きたい」と親に相談している子どもが多い。どちらかというところ「～がしたい」など、積極的な子ども・チャレンジ精神がある子どもが多い。住んでみないとわからないこともあり、住んで合わない子どももいる。
- 本土の人は普通は高校まで自宅から通う。黒島の場合は中学卒業で出る。それでも寂しいといっている。小学生ならなおさら。三島村はいまだに子どものホームシックは

- かだいであるということ。ここは親と連絡を取らせない。手紙だけ。電話をすると毎日してしまって、結果的に帰りたくなる。里親が親なのだという意識を持たせている。
- 小学校を利用して合宿型にした場合、最低でも何年くらいかかるか。→3年ではないか。施設設備の改修が必要。そのため予算計画を立てる・入札・契約などがあるため。
  - 佐世保市におねがいをするということだが、ここは了承されているのか。→まだ今から。
  - 市が了承しなければこの事業は無しになるか。→市でダメなら県に。それもダメなら学校法人にというように、依頼先を変えていく。
  - 男子と女子も関係なく受け入れるのか。→小学生男子・小学生女子・中学生男子・中学生女子と4部屋に分ける。
  - 三原さんが一人でやるのか→自分ひとりではなく、業者に委託して自分はコーディネーター的な役割を担う。
  - 児童生徒15名に対して、寮母さんは何人か。→地島の例からだが、2・3人を想定。
  - 仕事の内容は？→食事作り・洗濯や掃除など生活のお世話全般。
  - 病気のときはどうなるか。→三島村の場合と同様、常駐の診療所の医師対応。最悪の場合は、チャーター船やドクターヘリ。
  - 地島は時化ることがない。本土にもすごく近い。緊急時の対応もすぐできる。
  - 市や県を動かすためには、費用対効果があるかどうか。不登校児童生徒の受け入れなら、これだけ通えるようになったと出しやすい。受け入れる黒島の大人の人も、お金をもらう分だけでなく、小中学生を受け入れることによる生きがいや満足感も大切。このような数値として現れにくい利点をどれだけアピールできるかが市や県を動かす鍵になると思う。
  - 基本的に子どもが多いほうがいいに決まっている。応募をかけてみてどれくらいいるのかわからない→五島の奈留島でも募集したら、30名くらい希望があり、5名を決定したと聞いた。きちんとした情報発信をしていくことが大切だと考えている。
  - 受け入れたものの合わなくて帰るということもあるだろう。
  - 黒島が受け入れるときは、体操服や制服はどうなるのか、予備をこちらがそろえておく必要があるのだろうか。原則は実親負担となるのではないか。1年間という限定だったら、それまでの体操服・制服。買い換えるときに新しいものという考え方でいいのではないか。
  - 高いお金を出して校舎を建てた。ところが児童生徒数が減少しすぐ休校になるより、このような制度を取り入れて児童生徒数を確保していくことは市としても大切。
  - 普通、子どもは親元から通うべきだし、親元から通うもの。それをせずに来るのが島留学なので、そのマイナスを補うだけの魅力をいかに提供できるかが大切。ゲームセンターなどの娯楽はない。しかし、自然が豊かですぐ釣りができる。釣り上げた魚をその日のうちに食べるができる。飛び込んで海で泳げる。地元の人にとっては普通のことが地元ではない人にとって大きな魅力でもある。学校で言えば、少ない児童生徒数で、先生たちがよく目を行き届かせてくれる。そこをアピールする必要がある。

- 一番の懸念は、島に来た児童生徒が黒島の子どもたちを乱すことがあるのではないかということ。そのようなことがないために、面接等があるのではないか。そこが一番心配である。→三島村では、里親が里親連絡会を作って、里親で協議をしている。教育委員会との情報交換も行っている。
- 廃校にはならないで、休校になるので、そのように文言の修正をしてほしい。→修正はする。廃校にならなくて休校になったとしてもこの資料に示したことと同じようなことが起こっていくと予想している。
- 自分は、黒島の子どもだけで全然問題は無い。よその子どもを入れていく必要が本当にあるのだろうか。
- 親はそのような思いを持っていても、子どもがずっと一人でやっていくことに対して、子どもの立場で考えてみると難しい面がある。
- 一人ではできないことが多い。
- 黒島の子どもをできるだけ増やすことを考えないといけない。外に出て行っている人を黒島に戻さなければならない。
- 9万円では里親として戻ってこない。漁業に関わって5万円の収入があって、合わせて14万円あれば生活が何とかできるので、それで帰ってくるのではという考えだと思うが、その収入額では難しいのではないか。他に仕事がないと難しい。
- 島に戻って来られる環境を作らなければならない。
- 独身の男性の婚活なども必要。
- 島の住民が増えないと根本的な問題は解決しない。沖縄県の鳩間島では地元の子どものはいない。先生の子どもと外部の子どもだけ。もうすでに手遅れになっている。呼び戻したくてもできない。そうなる前に黒島は今から手を打てばまだ大丈夫ではないか。
- 校舎新築とこの外部の子どもを受け入れる話はセットであったのではないか。
- 離島というハンディキャップ、船で通うしかないというハンディキャップを乗り越えればいい話になるのではないか。
- 今後とも情報共有が必要である。

## 6 校章の選定について

- 新しい校章について、募集をした。児童生徒の作品が別紙のとおり12案がある。公正公平を期すため、名前は出していない。また、プロのデザイナーの竹原さんがすでに作成したデザインもある。一応紹介しておく。これまで協議した結果、
- 子どもの思いを読んでもみると、なるほどなあ后感心することがたくさんある。
- どんなに遅れたとしても12月までに決めて、新校舎の体育館の幕や校旗に入っていることが理想である。
- プロのデザイナーに修正を依頼したい。
- 5番は、全く新しいデザインで思いもよく表現されている。
- 6番は、これまでの校章のデザインをうまく生かしている。
- プロのデザイナーの方への謝礼（金額）によるが、2・3個デザイナーの方に修正を

してもらってからこの委員会で決定できるとよい。

- どれがいいか候補を本委員会で選定するとしているので、今の考えで挙手をしてもらうことにする。(木下教頭が集約して誰がどれを書いたか知っており公正公平を期すため挙手しないこととした) 5番→5名、6番→5名、11番→1名。

## 7 愛称名について

- 投票で決まった正式名称「黒島小中学校」だと、中体連や小大会で学校名がコールされたときに不具合が出る。中体連の時には「黒島中学校」と呼んで、小大会の時には「黒島小学校」とコールすることはできない。あくまで一つの学校になるので。
- 青潮学園は、地域の要望で愛称名を募集した。
- 愛称名を「はまゆう学園」としたら、そちらばかりが表に出てくる。投票で一番だったのに、なぜ「黒島小中学校」を使わないのかとなってしまう。
- 賞状をもらうときには「はまゆう学園」という愛称になるのか、「黒島小中学校」という正式名称になるのか。→学校の意向が優先される。
- 正式名称としては「黒島小中学校」が市議会で議決された。
- 愛称と正式名称の使い分けが大切。
- 「黒島みらい学園」が響きも意味合いも大変よかったが。
- 黒島小中学校が29票。黒島はまゆう学園が15票。みらい学園が2票。
- 校門と卒業証書には黒島小中学校という正式名称を入れる。
- 「黒島はまゆう学園」は長いので、「はまゆう学園」と前回の協議で話し合った。しかし、「黒島」という地域名を入れないのはいかがなものか。どこの学校?となってしまう。「はまゆう」のいわれも考えると「黒島はまゆう学園」がよい。
- 愛称名については、次回の検討委員会でも協議を継続することとする。

## 8 あり方検討委員会便り・あり方検討委員会議事録・その他について

- お便りや議事録はこれまで同様で、何か不適切なことや不備があればお知らせいただきたい。
- 黒木小学校への視察は11月後半で検討したい。
- 次回の開催は、9月6日(水)に開催する。

## 9 閉会挨拶

- よりよい学校にしていきたいと思うので、今後とも有意義な協議を進めていきたい。協力よろしくお願いします。

以 上